

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34305
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2013～2016
課題番号：25370320
研究課題名(和文) 『ダロウェイ夫人』を巡る変奏のテクスト考察

研究課題名(英文) Mrs Dalloway Revisited

研究代表者

廣田 園子 (HIROTA, SONOKO)

京都女子大学・文学部・教授

研究者番号：30368550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヴァージニア・ウルフの代表作『ミセス・ダロウェイ』(1925)の主人公クラリッサ・ダロウェイの、脇役としての誕生から長編小説のヒロインへと進化する軌跡、及び後世の作家たちによる様々な翻案及び改変の系譜を検証することで、文学史上においても稀有な一個のキャラクターの「転生」の意義を考察し、またその「転生」を可能としている本キャラクターのモダニティを分析するものであり、著書1点、雑誌論文4点、学会発表2点の形で成果を得た。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to examine the unique evolution of Clarissa Dalloway, who is created by Virginia Woolf, initially as a minor character in her first novel, and then developed into one of the most famous modernist icons. This character's remarkable plasticity has attracted a number of writers, which has culminated in a considerable body of adaptations and remakes. This study has resulted in 1 book, 4 articles, and 2 presentations.

研究分野：20世紀イギリス小説

キーワード：モダニズム アダプテーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、ヴァージニア・ウルフ、E. M. フォスター等の作家を中心とするモダニズム文学及び現代英国文学について研究を重ねてきたが、平成 23 及び 24 年度学術研究助成基金助成金（若手研究 B）を得て「21 世紀英国作家によるモダニズム文学再構築の意義」について考察した際に、イアン・マキューアンによる長編小説『土曜日』（2005）が同時多発テロ後のロンドンを舞台にしながら、モダニズム文学のキャンオンであるウルフの『ダロウェイ夫人』を強く示唆する構成になっている点に注目した。

(2) また研究代表者は、2008 年出版の『転回するモダン:イギリス戦間期の文化と文学』（研究社）掲載の論文、及び 2006 年出版の『ヴァージニア・ウルフ研究』第 23 号掲載の論文において『ダロウェイ夫人』について考察しており、その際に『ダロウェイ夫人』執筆前後にウルフが創作した短編と本テキストとの関連、及び『ダロウェイ夫人』の主人公クラリッサがウルフのデビュー作『船出』（1915）に端役として登場している点に、同一作家のテキストにおけるインターテクスチュアリティの興味深い事例を見出していた。

(3) このように『ダロウェイ夫人』というテキストを巡るインターテクスチュアリティの豊かな可能性に着目してきた研究代表者は、「アダプテーション」を巡る議論でしばしば言及され、現代における『ダロウェイ夫人』の翻案の代表作とも言えるマイケル・カニンガムの『ジ・アワーズ』（1998）を中心に、『ダロウェイ夫人』から派生した、あるいは『ダロウェイ夫人』を生み出した諸テキストを包括的に議論するという研究テーマを構想するに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究の題目で使用した「変奏」という

言葉は、カニンガムがジャズやロック音楽の反復楽節を意味する「リフ(riff)」という言葉を用いて、自らの作品と『ダロウェイ夫人』との関連を説明している点に着想を得たものであるが、本研究においてはこの概念を「アダプテーション」を含みながらもより柔軟な意味で使用したいと考えた。

(2) 例えば『土曜日』のように作者本人が『ダロウェイ夫人』との直接的関連を認めていないテキスト、あるいはウルフ自身が『ダロウェイ夫人』執筆前後に創作した、クラリッサが登場する断片的な短編等も研究対象に含み、分析することで、「変奏」がもたらす文学キャンオンの再解釈の可能性を考察し、インターテクスチュアリティという複雑な概念を理解する一助となることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 1923 年に生きる作家ウルフ、第二次世界大戦後の LA で『ダロウェイ夫人』を読む主婦、1990 年の NY でパーティを企画する編集者という 3 人の主人公が『ダロウェイ夫人』の主要モチーフを重層的に提示する『ジ・アワーズ』は、2002 年の映画化の成功と相まって『ダロウェイ夫人』が如何に後世の創作者たちの再解釈を促してやまないテキストであるかを強く印象づけた記念碑的な作品である。『ダロウェイ夫人』から派生した現代作品を巡る議論の土台として、本作の中でとりわけ文学テキストの不滅性、インターテクスチュアリティ等の概念を体現するキャラクターである編集者クラリッサ・ヴォーンに焦点を当て、考察を試みた。

(2) 『ダロウェイ夫人』から 4 年後のダロウェイ夫妻の姿を、夫リチャードの視点から描いた現代アメリカ人作家ロビン・リップンコットの『ミスター・ダロウェイ』（1999）は、所謂「続編」の形を取りながら保守党政治家リチャードのセクシュアリティについて大幅な書き換えを行っている。上述の『ジ・ア

ワーズ』とほぼ同時期に出版された本作は、もはや批評的に顧みられることは少なくなっているものの、1927年英国で一大イベントとなった皆既日食を見物するウルフ、という伝記的事実をプロットに取り込み、更にはウルフとクラリッサがテキスト中で「ニアミス」する、という極めてポストモダンな作者の試みについて、『ジ・アワーズ』との比較を交えながら再考した。

(3) 『ダロウェイ夫人』から遡ること10年、クラリッサは脇役としてウルフの処女長編『船出』に夫と共に登場している。そして8年の空白を経て彼女が主演として再登場した1923年出版の短編「ボンド・ストリートのダロウェイ夫人」が、小説『ダロウェイ夫人』の冒頭へと「変奏」する課程は、ウルフ自身が本キャラクターの「可塑性」を探求、発展させていったプロセスとして極めて興味深い。『ダロウェイ夫人』執筆前後に亘るこの他の数編の短編及び未完成のエッセイ等の分析も絡めながら、クラリッサ誕生の軌跡を詳細に検証した。

(4) ウルフの同時代人である E. M. フォースターの代表作『ハワーズ・エンド』(1910)の大胆なアップデートを試みた現代英国人作家ゼイディー・スミスの『美について』(2005)について、同じモダニズム作品のアダプテーションとして、『ダロウェイ夫人』を巡るテキスト群の比較材料として美学的アプローチから分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 2014年の日本ヴァージニア・ウルフ協会第34回全国大会におけるシンポジウム「メタ・モダニズムとは何か」に講師として参加し、マイケル・カニンガムの『ジ・アワーズ』と『ダロウェイ夫人』とのインターテクスチュアリティについての考察「“The Woman in the Book” 編集者クラリッサの(ポスト)モダニティ」を発表した。更にこの発表を発展させた雑誌論文「“Woman in the Book”

ジ・アワーズにおける文学的不滅の希求」を『ヴァージニア・ウルフ研究』第32号に発表した。テキスト中で最も自己言及的なナラティブとしてメタフィクショナルな要素を全面に押し出しているクラリッサ・ヴォーンの日を、カニンガムが如何にポストモダニズムのパロディとは異なる形で提示しているかを考察した本稿では、クラリッサが希求する文学的不滅がセレブリティ文化にすり替えられることで、自らが「書物の中の女性」であるという彼女の意識が、あくまで昔の恋人リチャードの小説のヒロインとしてであることが強調され、その結果クラリッサと『ダロウェイ夫人』あるいはウルフとの直接的リンクは希釈され、パロディに陥ることが回避されていることを結論した。

(2) 『ダロウェイ夫人』執筆前後に発表された短編及びエッセイを検証する過程で、特に『ダロウェイ夫人』との強い関連性が見られたエッセイ「病むことについて」の考察を雑誌論文「「病むことについて」再考 セプティマスの影と貴婦人の嘆き」として纏め、『英文学論叢』第57号に発表した。

(3) 英国サセックス大学で開催された Modernist Studies Association 第15回年次大会のシンポジウムに参加し、本研究のテーマと密接に関連するゼイディー・スミスの『美について』に関する考察を“A Decayed Wife and Rembrandt: Everyday Aesthetics in Zadie Smith’s *On Beauty*”として発表した。更にこの発表を発展させた雑誌論文「移ろいの美、改変の美 ゼイディー・スミス『美について』」を『英文学論叢』第57号に発表した。

(4) 『ダロウェイ夫人』とのインターテクスチュアリティを指摘されることが多いイアン・マキューアンの『土曜日』(2005)に関する英語論文“On Being Ill: Woolf, Darwin, and the Diseased Mind in Ian McEwan’s *Saturday*”を『ヴァージニア・ウルフ研究』

第30号に発表した。

(5) 4年間に亘る本研究並びにそれまでの『ダロウェイ夫人』及びモダニズムに関する研究の成果を、単著書『ミセス・ダロウェイの永遠の一日 モダニズム・アイコンの転生の系譜』に纏め、2016年に出版した。『ミセス・ダロウェイ』の主人公クラリッサ・ダロウェイの、脇役としての誕生から長編小説のヒロインへと進化する軌跡、及び後世の作家たちによる様々な翻案及び改変の系譜を検証することで、文学史上においても稀有な一個のキャラクターの「転生」の意義を考察し、またその「転生」を可能としている本キャラクターのモダニティを分析する本書は三部から成る。第一部では、ウルフ初の長編『船出』における脇役としてのクラリッサが既に体现していたモダンな可塑性に裏付けられた多面性を掘り下げることで、従来的に軽視されてきた本作でのクラリッサの意義を明示した。続いて短編「ボンド・ストリートのミセス・ダロウェイ」を取り上げ、クラリッサの第一の「転生」において彼女のキャラクターに前作から如何なる加工が施されているのかを検証し、長編『ミセス・ダロウェイ』の素地を築くまでのプロセスを考察した。第二部では、『ミセス・ダロウェイ』におけるクラリッサの一日が提供する幅広い批評的アプローチを概観することで、彼女のモダニティに関する議論を更に発展させ、その一例として「病」をキーワードとした議論を後半において試みた。第三部では、英米の現代作家による『ミセス・ダロウェイ』の翻案例である『ジ・アワーズ』、『ミスター・ダロウェイ』、『土曜日』の三作を取り上げ、現代に甦るクラリッサに施された改変の詳細を検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- (1) 廣田 園子「“Woman in the Book” ジ・アワーズにおける文学的不滅の希求」 『ヴァージニア・ウルフ研究』第32号、査読有、2015年、52-65頁。
- (2) 廣田 園子、「「病むことについて」再考 セプティマスの影と貴婦人の嘆き」 『英語英文学論』第14号、査読無、2015年、51 - 64頁。
- (3) 廣田 園子、「移ろいの美、改変の美 ゼイディー・スミス『美について』」 『英文学論叢』第57号、査読無、2013年、61-77頁。
- (4) 廣田 園子、「“On Being Ill”: Woolf, Darwin, and the Diseased Mind in Ian McEwan’s *Saturday*」、『ヴァージニア・ウルフ研究』第30号、査読有、2013年、61-78頁。

〔学会発表〕(計 2 件)

- (1) 廣田 園子、「“The Woman in the Book” 編集者クラリッサの(ポスト)モダニティ」、日本ヴァージニア・ウルフ協会第34回全国大会、2014年11月16日、相愛大学(大阪)。
- (2) 廣田 園子、“A Decayed Wife and Rembrandt: Everyday Aesthetics in Zadie Smith’s *On Beauty*”、Modernist Studies Association 第15回年次大会、2013年8月31日、サセックス大学(ブライトン、英国)。

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 廣田 園子、『ミセス・ダロウェイの永遠の一日 モダニズム・アイコンの転生の系譜』、京都女子大学研究叢刊 54、同朋舎、2016年、全 192 頁。

〔その他〕

書評

- (1) 廣田 園子「ゼイディー・スミス『美について』」 『図書新聞』第 3241 号、2016

年、4頁。

6．研究組織

(1)研究代表者

廣田 園子 (HIROTA SONOKO)

京都女子大学・文学部・教授

研究者番号：30368550